

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

2

2020

No.579



特集

- 塗布含浸材の有効性
- 建物長寿命化と防水

元々起こり得る倒木被害

鈴木 哲夫

最近の自然災害は、大規模な気候変動によって予測のできない被害をもたらすことが多くなった。そのような中、緑化条例によるランドスケープ・アーキテクチャー（造園や都市計画）において、自然との調和や景観形成をうたい文句としながらも、実際は、樹木にとって迷惑な植えられ方になっているケースが目につく。

樹種によって異なるが、そもそも高木は図の樹冠幅（四方の平均幅）に比べて、根張り範囲が少なくとも同等以上に広がると言われている。十分な根の広がりがないければ、写真1のように倒れてしまうため、樹木は本能的にせっせと根を広げて、地盤に自立しているのである。そんな樹木の性質を無視して植樹を行ったとしたら、樹勢は衰え、健康な樹木として生育することはできない。

台風で倒れた写真2の高木は、図のように樹高が7mほどあり、枝幅は3.5m程度であった。亜熱帯に自生するシマトネリコで、成長が早い樹種である。一方、ポット型の植込部は、内径が1.6m、深さは45cm程度で、下部に地下構造物があり、底はコンクリートになっていた。

また、写真3では、幅30cmの溝型植込にキンモクセイが植えられていたが、樹高2m程度で枝葉を丸くせん定した状態であった。これらは、いずれも根張りを広げることができず、抜けるように倒れたケースである。

樹木は浅根型が多く、広い根張り範囲を必要とする。植え込む時に直径1mほどの根巻きであつても、成長するにしたがい樹冠以上の根張りが必要となることから、高木を小さな植込ポットに植えること自体がそもそも誤りで、自然地盤に植えるべきではないか。また、高木のせん定は、強過ぎると根張りを弱めて先端が腐るとも言われ、不用意なせん定は、樹勢の衰弱につながるのを避けたい。上側に茂る中木は、風圧負荷がかかりやすいため、風通しを考慮したせん定を行い、頭を大きくし過ぎないことだ。

緑化外構計画は、例え見目で心地よい景観をつくり上げていても、足元を見れば樹木の経年に伴う生育の点で、いかにもバランスを欠いている場合が多い。建物の配置の関係で緑化面積を確保しにくいことは分かるが、健康な生育環境を形成することが本来の目標であるはずで、見せかけの緑化演出にとどまっていたり良いものか。緑化条例のひずみがこういったところに出ているように思う。

(有)鈴木哲夫設計事務所
代表取締役

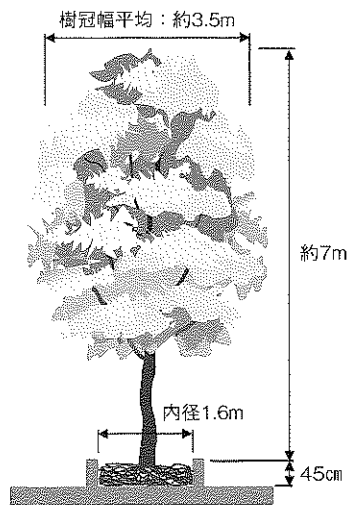


図 不適切な樹木の植込



写真1 台風により倒れたポット型単独植込の樹木



写真2 内径1.6m、深さ45cm程度の植込



写真3 幅30cm程度の溝形植込における倒木